

「元気にしようヨ！北海道」はまず、『北海道人に会いに行こう！』という観光振興策で ～21世紀は北海道の時代、北海道が持つ魅力、力生かそう～

シーズンステイなど「ちょっと暮らし」が人気 さらに、道内の人口流入促進を図れ

21世紀は早くも10年を経過したが、21世紀は北海道の時代、「北海道新世紀」の時代と位置づけたい。そして、早期に「北海道が持つ魅力、力(潜在力)」を生かして地域活性化を成し遂げ、元気な北海道にしたいと願う。

今の北海道の実態は、内閣府発表の2006年度の1人当たり県民所得の順位をみると、北海道は36位246・3万円と道民所得が6年連続減となっている(1位は東京482・0万円、最下位47位は沖縄208・9万円)。また、総務省発表の2009年の人口移動報告によると北海道は12、178人が転出超過(前年の転出超過21、129人)と人口の流出が続く。職が見つからないために、外に出て行く若年層が多かったとみられる。

しかし、悲観的なデータばかりではない。道が昨年度実施した利用者アンケートから、短期滞在型移住「ちょっと暮らし」の利用者の約6割が60代で、全体の2割は北海道への移住を考えているという。また、参加者の6割強が、道内滞在中にパークゴルフや農業体験などで地元住民と知り合う機会があったとしている。

少子化などによる人口減が進むなか、移住を促進する取り組みが、道内で熱を帯びている。住民票を移す「完全移住」だけでなく、二つの住居を頻繁に行き来する「2地域居住」や、好きな季節だけ暮らす「シーズンステイ」など、形態も多様化してきた。退職後の人生を謳歌する団塊の世代に市町村は自分たちのマチをどうアピールするのか。

また、近年、北海道と本州の間の企業・人・技術・商品の往来はますます活発になっている。

つまり、地域活性化のためには何としても人口流失を食い止める政策も重要である。

今後、ますます地球規模で世界的な問題となってくる水、食料、木材、エネルギー、(良好な居住)環境問題こそ「北海道が持つ魅力、力(潜在力)」である。

さらに、いままで述べてきたことで、忘れてはならない最大のキーワードは「熟年層への取り組み=良い仲間作り」と「地元住民との交流=進化した観光」と考える。

つまり、北海道を元気にする、地域活性化のためには何としても人口流失を食い止め、国内外から人を集合させる政策が重要である。

ユニークな提言、『北海道人に会いに行こう！』

観光客歓迎は人との交流でと米山道男氏

◆今年の新春号本欄で「元気にしようヨ！北海道」の一大展開を！と提言した。内容は「北海道の魅力は豊かな自然と食であり、居住環境だ。そこに、もう一つ、道産子のやさしさ、心意気という『ひと』(北海道人)の魅力を加え、北海道ブランドにしたい」という趣旨だ。『元気にしようヨ！北海道』のステッカー、ポスターなどの宣伝材料を作成し、交通機関やマイカーなどに貼ってもらう、などが展開方法だ。できれば、東京など本州にも運動を広げたい。まず、道民の気持ちを知る、前向きにすることが経済活性化の道筋になるのではないかと。

この考えと同様な提言が北海道新聞朝刊(4月19日付け)「私の発言」欄に掲載された。

「観光客歓迎は人の交流で」というタイトルで、「旅のおもしろさは風景や食べ物だけでなく土地の歴史に思いをはせ、住む人たちの暮らしぶりを見、出会った人と話すことにあるのではないかと。北海道を訪れる旅客にもそうした体験をしてもらえれば、北海道がもっと好きになってもらえる」とした上で「道内各地に従来の観光協会とは趣の異なる『旅客歓迎交流協会』をつくり、まずは『北海道人に会いに行こう！』をキャッチフレーズとして人の交流を図ってはどうか」という提案だ。発言者は北大名誉教授の米山道男氏。

構想の内容について米山氏は「協会の構成メンバーは住民有志、旅行代理店、行政、宿泊施設など、旅客誘致に関心のある組織。日常から地域内の情報を収集整理し、地域の歴史を勉強しておくことや、旅客案内場所や旅客参加行事の調査整理も必要です。協会メンバーに在日外国人の参加を期待しています」と具体案を提示する。この構想は1年ほど前から小規模市町村などの活動として考えていたようだが、現在、弟子屈町のミニホテルが興味を示しているという。

米山氏は「北海道の良さは何といっても、ここに住む人々にある。旅客と地元住民との交流を核とする新しい観光振興策としてこれを発想した」という。

小誌や米山氏の提言、コンセプトはいずれも「北海道を元気にしよう！」というもので、北海道の観光振興や地域活性化の進化形である。実行が急がれる提言であろう。